

### 第3回 府立須知高等学校の在り方検討会議（概要）

- 1 日 時 平成29年7月3日（月）午後3時～同5時
  - 2 場 所 府立丹波自然運動公園 京都トレーニングセンター研修室
  - 3 出 席 者 17名  
府教育委員会 前川教育監、井上高校教育課長、  
相馬高校改革担当課長ほか
  - 4 概 要  
(1) あいさつ  
(2) 説明  
(3) 意見交換（主な意見）
- 

#### ■説 明

##### □府教育委員会：資料説明

##### □須知高等学校長：資料説明

資料は、京丹波町における須知高校の在り方懇話会の提言等これまでの経緯を踏まえて、校長私案として独自に考えたものである。

タイトルは『「農」・「食」の融合と柔軟な普通教育への革新』とし、他の地域から選ばれるために、また、地元の生徒を責任をもって育てるために、という両面で捉えている。京丹波町の中学生数が減少する状況を鑑み、地元生徒を大切にすることを基本におきつつ、他地域からも呼び込む姿勢が必要と思っている。

活性化を図るための魅力ある学科設置として、一つは、「食物調理科（仮称）」（家政学科、定員20名程度）を考えている。和食と京文化を学び、卒業時には、調理師免許を取得すること、また、NPO法人日本料理アカデミーと連携した取組を行い卒業後即戦力となる人材を育成する。また、丹波自然運動公園を活用し、地域と協働した三重県立相可高校のような高校生レストランを運営するといった内容である。

次に食品科学科（定員40名程度）は、地元企業と連携した生産、製造、販売流通までのトータル学習や農業の第6次産業化、丹波栗や黒大豆等京丹波ブランドの活用や農芸高校との互いの教育施設設備を活用し合った協働学習を一層進めること、そして、ウィードの森でのおもてなしカフェ等を考えている。

普通科（定員60名程度）については、アクティブラーニングによる京丹波魅力発信の展開、また、SA（スーパーアドバンス）コースでは特に難関大学進学を考えているが、タブレットの常時活用やICT機器等による新しい補習システムを導入して、着実な進学のサポートや、柔軟な教育課程の編成により多様な生徒のニーズに対応することとし、単位制により生徒自身が興味関心のある科目を選択・修得できるようにする。また、連携型中高一貫教育として、京丹波町立中学校から本校への進学を見据え、教育課程で中高で連携した教育を進めることを考えている。また、企業インターンシップを平日に行うことも可能な時間割が組めるよう卒業に必要な単位を弾力化することも考えられる。

また、部活動等、その他の魅力化に向けた方策として、一つは寮の整備、あるいは地域協働によるホームステイ制度（下宿）の創設がある。また、今年度も教育活性化推進協議会を通じ102万9千円の交付金をいただいているが、そうした町の支援による様々な資格取得の取組充実、さらに、生徒の家庭学習について、学習支援センターを設け、外部講師に来ていただく等して補習等勉学の充実を図る。最後に、ホッケー部、野球部の強化をはじめ、地元中学校と連携した各種競技の競技力向上を図り、中高と継続して取り組めるようにしていきたい。

■意見交換（主な意見） ○：出席者 ◆：府教委 ◇：進行

◇ 今回、学校長からは自由な発想で、高校を存続し今後も発展していくために必要と思う方策について案を示していただいた。内容についてご意見をいただき、今後教育委員会として高校の在り方に関する方向性を見いだしていきたい。そのための示唆をいただければと考えている。

○ 発想、視点は私の考えとほとんど同じだが、須知高校は食品科学科があるのでそこで調理師資格を与えることが考えられないか。既に取り組みされている食品衛生管理者の資格をとるための科目と重なる部分も多く、対応しやすいと思う。また、須知高校の最大の弱みは通学しにくいことであり、バスの対応にも限界があると思うので、やはり寮が必要ではないか。また、継続して1回20食以上又は1日50食以上を調理・提供するという調理実習施設の基準をクリアする上では寮で20人以上の生徒を確保すれば実習施設になり得る。内容としては和食、京文化も良いとは思いますが、まずはしっかり基礎を学んで資格を取得させることが必要だと思う。その先としてそれぞれ専門の分野に進んで行く方が良いのではないか。

また、部活動について、団体競技は個人も学校も負担が大きい陸上、水泳、テニス、卓球等個人競技が選ばれる傾向にあると思うが、やはり、地域とともに燃えるスポーツとなるとホッケーではないかと思うので、須知高校はホッケーに集中してはどうか。その分ホッケーをしたいという生徒には普通科、食品科学科で枠をつくって寮に入れる。入寮した生徒は、そこは調理の実習施設として自分たちが食べるものを自分で作る。そのため食事提供の人件費も不要になる。高校の生産物も計画的に使えて寮経営に資するのではないか。

連携中高一貫については、園部高校の二番煎じでは追いつけないと思うので、須知高校の教員が管内の三つの中学校と連携してチームを作り、他の中高一貫校の良いところを取り入れつつ、中学校段階から須知高校への進学も見据えて一緒に生徒を育てていく仕組みを作ってはどうか。例えば、各中学校で5名ずつ、計15名枠を作って寮に入ってもらおう。塾と連携して高校のトップクラスの生徒の得意・苦手の分析指導をしてもらう。成果が上がれば中学校からは必ず来てくれると思う。

なお、これまでの議論で林業について少し出ていたが、山の作業は危険を伴うため中途半端な取組はしない方が良い。高校段階から学びたい人は北桑田高校の森林リサーチ科に行った方が良く考える。

食品科学科の農畜産物の生産・加工から料理まで一貫した教育内容は大切にすべきである。食品科学科を例えば食品スポーツ科にして、ホッケーがしたい生徒には枠をつくり、調理師資格をとるようにする。普通科ではスポーツコースを作りホッケーをしたい生徒に入ってもらいつつ、普通科でも希望すれば料理コースや農業の実習を選ぶことができるようにならないかとも思っている。

◆ 食物調理科（仮称）について、調理師免許を取得する点に限って申し上げれば、施設のこともあるが、実習のためはかなり授業時間を確保しなければならないため家政科でないとい取得できないという制約がある。

○ この高校の調理学科は農業の生産流通までやっている、ということまで打ち出せば、将来、料理関係に進む上で深みになる。

○ 「どのような人をつくるか」という視点から資料がまとめられており、それも大切だが、産業教育として「どのようにして地域が支援するか」という観点も大切だと思う。南丹高校のテクニカル工学系列では地域の50以上の企業がサポーターとして工場見学をはじめ様々な支援をされている。京丹波町においても丹波黒大豆、大黒しめじの他、酪農関係の素晴らしい生産、食品加工業、さらにはものづくり企業とし

て様々なメーカーがある。地域の企業が様々な「技術」によって須知高校を支援するところから考えると、調理師免許というよりも、食品加工の基礎等様々な分野で幅広く支援をいただくことが大切ではないか。

林業大学校では独自に府が考えた資格をつくり、その取得を呼びかけることもしている。「どのような人をつくるか」に加え、「どのようにして地域が支えていくか」という観点で捉えることによって、どのような学校づくりをすべきかが見えてくるのかと思う。

- 他の地域から選ばれる専門学科、という提案であったが、この「他の地域」というのは口丹・中丹地域辺りか、又はより広域を想定しているのかによって多少変わってくる。口丹地域から進学可能な高校の中に食物系はないと思うので、一つの魅力にはなると思う。もう一点、食物調理等の場合は、就職という出口の問題がある。例えば調理師免許を取って職に就くことができる出口確保も検討いただいた方がよいのではないか。

資料を見ていると、進路先で専修・各種学校と就職が20数名いるが専修学校へ行くというのは様々な資格を取得しての就職を見据えたものと思うので、高校で調理師免許が取れるのは大きなメリットがある。いずれにしても、出口が重要である。

- 地域の捉え方であるが、府内はもちろん可能なら全国からと考えている。食物調理科の進路先としては、全国の食に関する関連産業、レストランや料亭、ホテルのほか、専門学校や四年制大学、短期大学への進学を考えている。

- 今回の校長私案と府教委とはどこまで協議されているのか。府教委は全く知らないでは話にならないと思うが、とりあえず意見を聞いてみようということなのか。

なお、案の内容については賛成である。京丹波町は食材の町で、畜産についても府内1、2位を争う町である。まさに名実ともにウィード農牧学校発祥の地であるということであり、それは大事にしなければならない。

食と農との関係をどのように取り進むかであるが、できれば農畜の生産から加工までを一元化してほしい。農芸高校の教育内容とどう調整するかという話になるが、須知高校で一貫してできる環境整備が必要である。

須知高校で問題になるのは、非常に通学しにくいということである。そのことを解決し、さらに教育効果を高めるためには絶対に寮が必要である。旧須知農林学校の時代には男子寮、女子寮があり、そこで寝食を共にし切磋琢磨しながら勉学にいそしんだという歴史がある。専門教育を通学で行うのは非常にやりにくいと思う。寮については様々な課題があるようだが、教育効果を思えば必要な条件でなかろうかと思う。なんとか具体化してほしいと要望する。

- ◆ 今回の案であるが、行政ではどうしても先に課題や制約等を考えてしまいがちである。子どもが減っていく中で須知高校をより魅力的にするために守りではなく攻めの姿勢で案を考えるに当たり、行政の視点ではなく純粋に教育者としての学校長の視点で考えていただくようお願いしたもので、この案に府教委の意見や制約は一切入っていない状態である。この内容について、我々では思いつかないようなご意見もいただく等しながら、行政として何ができるか考える必要があるかと思っている。ただ、寮のように大きな予算を伴うものについては即答できるものではない。本日は、校長の発想を基に様々なご意見を聞かせていただきたいと考えている。その中から実現できるものを探り、今後検討させていただくつもりである。

- 須知高校においても今後校内の協議でどんな意見が出てくるかは興味があるところである。

また、寮に関連して、例えば丹波自然運動公園にある300名規模で宿泊可能な旧

宿舎を再活用することはできないか。現在地方創生が叫ばれているが、地方創生は人口減少をいかに止めるかが最大の課題であり、そのため移住、定住の取組が進められているが、病院、学校があるか、買い物が便利かということが重要なポイントになる。「高校がない」となると最低条件が外れてしまう。今後、移住を促進して人口減少を食い止めようとする教育施設は必要である。そうした観点から、府立施設は地方創生戦略の中に盛り込んで有効に検討していただきたい。

- 小学生でなりたい職業のアンケートをとると、男の子はスポーツ選手、女の子はケーキ屋、パン屋という回答が多いが、須知高校にはそれができる環境が全て揃っており、なぜそれを活かさないのかと思っている。高校生レストランという話も出たが、三重県のようにメディアを使って宣伝すれば、全国から須知高校にも来るのではないか。そのためにはぜひ寮を作っていただきたい。

高校に多くの人を呼び込むためにはホッケーでも良い。兵庫県の篠山市でホッケーをしている子どもたちは天理高校や報徳学園に行っている。篠山市から須知高校までは、車の送迎が必要だが30～40分で来ることができる。寮を作って全国募集を考えてもらえたら一番良いと思っている。校長先生の案は保護者として大変嬉しく思う。

- 食物調理科（仮称）の設置の重要性、また修了時の調理師免許の取得について実現の願いを込めて話をしたい。京都府の財政状況等の問題はあろうかと思うが、本町を考えたときに須知高校の存続はもちろんのこと、本町の地場産業、食に関して考えると、提案のあった食物調理科の設置はぜひお願いしたい。また、今後、多様な高校が設置されていく中、須知高校には、今後調理師免許取得のように何か特化したものが必要だと思う。授業時間、カリキュラム、施設設置費用等課題はあろうかと思うが、どんな経済状況にあっても教育への将来投資ということを考えてほしい。

須知高校においては、本町の特色を見る限り京料理で進めるのが良いと思う。京丹波町で食を活かしていくためにも、こうした新設学科を作っていただき、他にはない調理師免許をとっていただきたい。公共施設に入るときには、必ず「調理師免許を有する者」という条件がある等将来に向かって必要性は高まっているし、起業するときには、調理師免許か管理栄養士いずれかの免許を有する、または講習を受けなければならないようになってきているので必要なことと考える。ぜひ学科新設、調理師免許取得という道を開いてほしい。

- ◇ 普通科については地元の生徒を責任をもって育てるという一番基本的な部分があるがそれについて意見をいただきたい。

- 京丹波町で議論してきた須知高校の在り方懇話会においても京丹波式中高一貫教育について提言していた。中学校と高校が連携を深くし、郷土愛を育み、地元の企業に関心を持てるような教育をすることが非常に重要であると考えており、町も検討するとのことであった。

- まず調理系の学科を置くことについて、町の懇話会でもその方向性で議論いただいた。本日は校長私案ではあるが、初めて出された高校からの具体案ということで歓迎し、地元側からも推進したい。家政科設置には様々な課題があるが、ぜひ府教委でも検討いただきたい。

普通科であるが、京丹波町における中高の連携した教育の充実は追究すべき課題である。地域創生型の高校として運営を地域に委ねられる特区のようなものならば、可能性があるのではないか。中高一貫、連携教育はその基盤が整いつつあ

り、京都大学と須知高校、小中学校との環境・食育のパートナースクール事業や高校から中学校への出前授業等が実施されているし、できる範囲で京丹波町方式の中高一貫を地元教育委員会の立場からも研究していきたいし、そのことが中学校の学びをさらに豊かにする上で有意義なものとする。

普通科の中で探究型学習による京丹波魅力発信の取組であるが、もう一步進めて、隠岐島前高校の地域創造コースのような、地域を学びのフィールドにしたコースを作るべきである。普通科としての科目の他に、地域の人を先生に招き、地域の課題を一緒に学ぶ取組の成果として観光甲子園で全国優勝している。このようなコースの設置により、地域の人に学び、地域に誇りを持ち、地域課題を学んで、地域創生の意識を持った人材育成の視点からも、年間を通じて地域の学習ができる普通科の新しいスタイルを学校で検討いただけたらありがたい。

- 国公立大学や難関私立大学を希望している生徒の割合はどれくらいなのか。そういう大学を目指す子どもは授業以外の家庭学習あるいは放課後の学習をかなりしていないといけないと思う。この地域に予備校、進学塾等がどれくらいあるかにもよるが、一定の割合希望する生徒がいるなら、普通科の放課後に補習システムといったものを完備していくことも必要ではないかと思う。
- 生徒たちは学年進行で進学意識は強くなっていくものと思っている。そこで学べる環境が整っていればその思いを実現することができるわけである。地域の予備校や塾の資料は持ち合わせていないが、他地域に比べれば少ないのではないか。そういう意味からも学習支援センターの役割が大きくなると思っている。
- 例えば、蒲生野中学校は高校から近いが、入学実績を見ると普通科15名、食品科学科9名しかいない。須知高校は一生懸命やっていたが、それが結果に結びついていない。ある亀岡市の篠に住む子が、成績でオール4を取ったら亀岡高校、3もある子は南丹高校を目指せと塾から言われたとのことである。  
須知高校における様々な取組に対し、中学校からありがたいとは言っておられるが、現実には24名しか入っていない。他の子どもは園部高校等にも行っている。ここでせつかく議論しても、保護者も含めて同じ気持ちにならないとそれが生きてこないのではないかと思う。
- 最近の中学生の進路選択の状況であるが、現在は専門学科等様々な分野があり、それぞれの興味関心に応じ選択肢が広がっている。また、高校を選ぶ要素としては部活動、大学進学、就職という点が大きい。部活動については、例えば、須知高校は野球部、ホッケー部に大変力を入れておられ、バドミントン部も新設する等数も増やしていただいているが、須知高校に無い部活動をしたい生徒は他校を希望する。須知高校で部活動をしたい生徒や希望進路がはっきりしていない生徒、少人数できめ細かな指導が本人に適していると思われる生徒は、地元で育てていこう、という思いで中学校として取り組んでいる。例えば、本校ではPTA総会の時や三者面談の時に須知高校の取組や最近の実績を紹介している。具体的には、須知高校は生徒数が少ないため大学進学者数は少ないが、進学率や国公立大学進学者数については、過去何年間かの統計によれば他校と遜色ない。中学校で成績が中位の子が須知高校に進学して、その後国公立大学に入学した例もある。大変少人数の中できめ細かな指導をしていただいている。こうしたことも含め生徒や保護者に紹介しているところである。また、中高では実際に様々な連携をさせていただいており、放課後補習授業や学校紹介に来ていただいたり、また部活動でも専門的な指導をお願いしており、地元の須知高校の頑張りを中学生が直に感じ

るような取組もしている。ただ、先ほど述べたように工業や水産関係に行きたい等の意志が強い生徒はそちらに進学することになる。今後、今まで以上に須知高校の良さを中学生にはアピールしたい。

- 蒲生野中学校の入学者数について話があったが、資料P 5で平成29年度の管内の府立高校在籍者数が確認できる。現在、須知高校における蒲生野中学校出身者は、全学年で普通科56名、食品科学科26名で合計82名である。園部高校には普通科15名、京都国際科12名で27名である。蒲生野中学校の多くの子どもはやはり地元の須知高校に入学している。ただし、現在はこの通学圏の一定の枠の中でそれぞれの希望進路に合わせて高校を選べるシステムになっており、かつてのように蒲生野中学校の生徒がこぞって須知高校に行くとはなっていない。しかし、生徒の様々なニーズにきめ細かく応えること、例えば、須知高校普通科の進路希望はここ10年ほど大学、専門学校、就職が3分の1ずつであり、10名程度の特別進学コースを設置することにより国公立大学への進学も可能とする等、幅広い進路希望に対応した取組を行っておられ、こうしたことを丁寧に進めていくことで地元中学生の須知高校への進学につながるのではないかと考える。
- 中高連携は今後普通科のコース名等にして、中高一貫校で行っているような教育内容を勉強できるよう中学校と高等学校の教員が責任をもって分担し、地元の中学校から高校のSAコースに入れる態勢を早く築くことが非常に重要である。これが普通科の魅力になるし、実績が上がれば地元中学生も須知高校を選ぶであろう。併せて、ホッケー部を常勝となるようにしつつ、寮も整備して、普通科、食品科学科にスポーツ枠を設けて他府県からも受け入れたり、中高一貫を活かして地元からも来てもらう。それから、家政科の設置については、須知高校の良さが生産から加工、調理まで学べるということであれば、例えば「食品家政科」としてはどうか。農芸高校との連携も重要だが、須知高校の農業科の実績を踏まえ、例えば、寮へ入った普通科の子も農業を学ぶ機会を作る等、須知高校にある様々なコースを普通科の生徒が利用できるような道もあってよいのではないかと考える。そういう多様性があったほうが単に〇〇学科を出たというよりも、スポーツをやるのと同様、実学で本当に生きる力を育む素になると考える。
- 家政学科、寮制について大賛成である。私は小学生のホッケーの指導をしていることもあり、ホッケーを全面に出していきたいという思いはある。自分の子どもの同級生を見ていると、将来は医者になるといって塾に通っている子どもを目にする。将来を考えている子どもも確かにおり、それを考えると今まで出された須知高校の取組に関する意見等はすごく意味のある話だと思う。ただし、そこまで将来のことを決められない子どもたちも決して少なくはない。そういう子を須知高校に呼ぶ手立て、須知高校に入ってから、いろんな経験をする中で将来を考える場にしていくという考えも大事ではないかと思う。単純ではあるがイメージを良くすることは大切である。例えば、どうしても都会に憧れて南へ向かう傾向があるという話がかつてあったが、街に憧れる、お店がたくさんある、マクドナルドでお茶ができる、それらを須知高校でできるのかというとなかなか難しい。だからせめて、高校のイメージを良くするソフト面の取組ができないだろうか。例えば、制服で学校を選ぶ子どもも実際にはいると思う。制服を子どもが着たいと思うデザインに変えることも必要だと思うし、校内でお茶ができるようなくつろげる空間を作っていくことも考えられる。寮をつくる話があるのなら、昼食のためにちょっとした食堂、売店等もできないだろうか。学園祭ももっと開放的に地域の方々、中学生を呼び込めるような日程や内容にして、中学生に「楽しい。面白そうな学校だな。」と思ってもらい、将来は何になりたいかはまだわか

らないけれども、楽しそうな須知高校にとりあえず進学してみよう、となるようイメージアップを図るのも一つである。

○ 以前は食品科学科で野菜のほか果物を作っていた。最近は果物はあまり作っておられないと聞いたが、私の在学時は梨、ぶどう、桃、他にはスイカやメロンも作っていた記憶がある。野菜は家庭菜園の延長で何となく知っていたりするが、果物は高校で栽培してはじめてこのようにできるのかがわかったと思うし、道の駅等でも果物は人気商品だと感じる。果物は乳製品ととても相性がよいため、将来的に高校で果物を作ってもらってコラボした商品ができたなら面白いなとイメージしていたので、手入れは大変かと思うが、家政科、食品科学科で果物の栽培もしてもらえると良いなと思った。

○ 前回「3クラスは確保」あるいは「学舎」という厳しい現実を聞き、ショックも受けながらも現実を見なければならぬと思っていたが、今回、校長先生から、我々と同じ意図の提案をいただき、また、いろんな意見が出てきて、非常に有り難く感激しているところである。

なお、「選ばれる学校」というのも良いが、むしろ「人が集まる学校」づくりという発想が大事ではないかと思う。「人が集まる」ということが必要なのではないか。それが攻めにつながるのではないかと思う。中学校との連携では、部活動の連携が一番取り組みやすく、一緒に指導して育てていくということができるのではないか。中高一貫については、地域教材等も中学校と一緒に開発し、それによって地域を知ってもらうことも必要だろう。

ホッケーについては、ちょうど日本女子代表チーム「さくらジャパン」に須知高校出身者がいる。東京オリンピック前でもあり、このことはやはり大事にしていく必要があるだろう。もう一つは、トレーニングセンターや丹波自然運動公園が近くにあるので、もっと巻き込んで色んな知恵を出していくことが必要だろう。この会議は非常によかったと思うし、さらに巻き込んでいってみんなの意見を結集できることが発信力になるのではないかと思うので、同窓会としても努力していきたいと思う。

○ 須知高校の存続に向けては、やはり原点に帰る必要があるかと思う。京都府農牧学校として明治の新生京都府のために絶対に必要だということで当時の知恵者が集まって政策的につくられた学校だと思っている。須知高校は普通の学校ではなく、地域創生型の学校であると、しっかり京都府教育委員会にも認識いただきたい。今、求められているのは、地域をどうやって振興させるかであり、その中核を担える高校でなければならぬと思っている。子どもが少なくなり、全国的に人の取り合いとなった場合に求められるのは特色ある学校だと思う。その意味では校長先生の提案には色んな知恵がたくさん詰まっている。

もう一つ、京丹波町は人口が非常に少なくなっているが、起死回生策は遠回りであってもやはり教育が一番大事だろうと思っている。京丹波町で子どもたちを生み育てれば、就学前教育から高等学校を出るまで、一貫した素晴らしい教育が受けられるということを、しっかり考えていくべきだろうと思っている。中高一貫という話もあったが、私は就学前から高校までの一貫、連携した教育サイドのつながりが非常に大事であり、特に、進路に向かって勉強する時期である中学校、高校では、三つの町立中学校を実質的に須知高校の附属中学校化してしまうことが大事かなと思っている。もっと連携を強めて須知高校へ導いていくことが必要。

ホッケーに特化して全国レベルの子どもたちを集めることや、提案のあった調理師免許取得、学習支援センターも非常に大事だと思っている。そして何より、子どもを集めるには通学が大きな課題であるため、政策的に寮の整備もしっかりやっていく必要があると思うし、できれば府でスクールバスを運行するくらい大胆な考え

も大事だと思っている。調理師は日本全体で需要がどれほどあるかわからないが、健康という分野に関わって栄養士の育成を考えてもよいのではないか。ただ、全て詰め込むと特色の無い学校にもなってしまうこともあり、今回は高校からの提案をしっかりと研究することが大事だと思う。町としてもしっかりと支援するためには、給付型奨学金の拡充等の政策も必要だし、京都府でも教育委員会だけで考えるのではなく、知事部局と地域創生型高校というものについて議論してはどうか。あるいは知事の考え方も聞いていただき試験的な新しい高校づくりということで、ぜひ頑張ってもらいたい。町としても協力は惜しまない考えである。

- 女性の立場からは、一生の仕事にできるものとして卒業時に調理師免許を取得できるというのはすごく魅力的だと思う。私は須知高校普通科を選んだ後、栄養士になろうと志したが、高校段階から調理師免許を取得でき、かつ栄養士の勉強もできることについては、スタート時点が違ってすごく勉強しやすいと思う。

それから、食品とスポーツはとても関係が深く、そこを追求しながらより勉強して栄養士を目指す道というのもイメージしてもらえると良いと思う。中学校段階でもそういう道に進めるという予備知識を与えてもらえるよう、頑張ってもらってほしいと思う。

ケーブルテレビで、須知高校が味夢の里でソムリエと協議しながらソフトクリームにクッキーを付れたり、野菜の素材を活かした研究をされている様子が放送されている。皆がどれくらい見ているのかはわからないが、ぜひ見てもらって「こんなことをやってるんだ。」とみんなで感動して須知高校への思いを強めてもらうことも必要と思う。女性の会では、今年もゴーヤの苗を先日引き取りに行かせていただき、環境に役立ててもらおうと各施設等に配らせていただく等しており、これからも高校と一緒に取り組んでいきたい。

- 町内に高校生がくつろげる場がなかったり、京都市内のような商業施設がないということは申し訳なく思っている。ただ、十分とは言えないかもしれないが、田舎の15,000人いない町にしては、一応の施設は揃っている方ではないかと思う。

須知高校の食品科学科でどのようなものを作っておられるか承知していないが、商工会にある亀岡市、南丹市、そして京丹波町商工会議所で一緒に運営しているビジネスサポートセンターにおいて、様々な素材を企業と連携して学校教育に取り入れて作っていきこうということで、ほとんどが須知高校とコラボしていただいている。商品化できたものとしては、竹のお茶や、黒豆を入れたパン等があり、府の補助を受けながらも少しでも学校教育に商工会が協力させていただければ、ということで2市1町の商工団体で懸命に取り組ませていただいていることはお伝えしておきたい。南丹高校にテクニカル工学系列ができたときに、2市1町のものづくり委員会が懸命に企業にお願いして様々な機械をいただいたということもある。もし、須知高校で新学科ができるのであれば、飲食店等でたくさん機材も持っているのも、同じようにしっかり企業として支えていくという覚悟があることは責任をもって言わせていただくので、ぜひ府で検討を進めていただければと思う。